

論証的知識としての哲学

ーライプニッツ『ニゾリウスへの『序文』』(1670)における哲学的言語の問題ー

パリ第四大学大学院博士課程 今野諒子

はじめに

1670年、ライプニッツはある人文主義者の著作の再版を試み、長大な序文を書き上げた。マリウス・ニゾリウス『偽哲学者らに対抗して哲学するための真の原理と方法 全四巻 (*De veris principiis et vera ratione philosophandi contra pseudo-philosophos libri IV*)』^①への序文 (*Dissertatio praeliminaris*)である(以下、『序文』)。修辞学と文法学の側から、知と雄弁の結合を哲学の原理とするという点において、ニゾリウスはキケロ主義者であった^②。しかしながら、*methodus*の代わりに *via et ratio* を用いたキケロ^③に倣い、自身の哲学を表明した彼の姿勢は、人文主義の歴史において、いささか特異な位置を占める。14世紀には、翻訳の誤りや古典古代の著作家らの原義が汲まれていないという理由から、従来の哲学用語を破棄し、とりわけキケロのものでない用語を徹底して避ける動きが見られるものの、16世紀に至るまでには、哲学用語の諸々の原義が知られるようになり、こうしたラディカルな傾向は改められるようになったからである^④。

それから更に一世紀後、哲学の真の方法と「哲学のスタイル」を模索していた若きライプニッツは、ニゾリウスを哲学の「改革者」として賛美した。ただし実際には、『序文』全体、そして、その後に付された1669年4月30日の『ヤコブ・トマジウス宛書簡』において、ライプニッツはニゾリウスに反してアリストテレス主義への傾倒を見せており、彼が完全にニゾリウスに従っていたわけではないことは明らかである。ライプニッツにとって重要であったのは、ニゾリウスが哲学にとって適切な表現の方法を確立するために、専門的な用語を一般向けの用語へと還元した点であった。哲学的言語の改革者という意味で、ニゾリウスはライプニッツにとって一つのモデルであった。「表現の方法(*dicendi ratio*)は哲学者の勤めとして相応しい」(A,VI,2,408)からである。

1. 「論理学」の射程

『序文』においてライプニッツは、哲学的言語の問題を「論理学」の領域で扱うことを試みている。はじめに、「論理学」の定義を引用する。

「真の論理学は、単なる道具ではない。そうではなく、哲学するための諸原理と真の方法を何らかの仕方で含んでいる。」(A,VI,2,408)

「[[修辞学には二つの部分があることを説明した上で] このように論理学にも二つの部分がある。一方は言葉についての (verbalis) 部分で、他方は実在的な部分である。前者は、明晰かつ判明で適切な言葉の用法、すなわち哲学のスタイルを対象とする。後者は、思惟を導くことを対象とする。」(A,VI, 2, 420)

ここで示されているのは、「哲学のスタイル」を確立するために、言語表現の問題を避けて通ることはできないというライプニッツの態度表明である。ただしそれは、特定の集団のみに帰属する専門用語の表層的な改変を意味するのではない。上述したように、一般向けの用語での表現を試み、共通の言語についての考察をも射程に入れた上で「論理学」が構想されているのである。

ところで、なぜライプニッツは自身の論理学の正当性を主張したのだろうか。そもそも 17 世紀の「論理学」が、学派の観点からも、対象となる推論の種類の観点からも一義的ではないという事情^⑤が挙げられるが、以下の歴史上の文脈を考慮する必要があるだろう。第一に、林立する諸学派間の知的次元でのコミュニケーションのために哲学的言語の模索が当時のドイツにおいて喫緊の課題であったという点^⑥、第二に、修辞学の伝統を評価し、論理学との関連を強める方向での論理学改革は、従来は実践の領域で用いられていた推論の適用領域を拡大することにつながり、知識の実用的側面が強調されることになったという点である^⑦。言語表現の問題を含む論理学改革が、哲学、そして知識の改革につながっていたのである。ニゾリウスを一つのモデルとした哲学の改革は、ライプニッツの個人的な企図にととまらず、このような歴史的な文脈に位置づけられる。

以下、本論では、ライプニッツの定義する「論理学」の第一の部分が第二の部分とどのように関係するのか。すなわち、言葉の用法といった言語表現の次元の考察と厳密な推論上の議論がどのように関係するのか、両者の接続の問題に絞って考察を進める^⑧。両者が何らかの関係をもつのだとするならば、前者において、通常の使用法を確定する意味論的考察の次元と、厳密な学問的推論に適用される用語の定義の次元とで、ライプニッツはどのような区別を設け、議論を進めているのか。そして、あるべき「哲学のスタイル」とはどのようなものか。これが本論の主題である。

2. 「明晰さ」の基準

『序文』が言語表現の問題から哲学の改革を志向するのであるならば、テキスト読解上の論点として第一に注目されるのは、「明晰さ (claritas)」、「不明瞭さ (obscuritas)」、「曖昧さ (ambiguitas)」が、いずれの場合も意味論上の基準として議論されているという点である。これは、1684 年の『認識、真理、観念についての省察』が一貫して認識論上の議論であることとは大きく異なっ

いる。「明晰さ」は、言説(oratio)に含まれる全ての用語(vocabulum)の意味(significatio)が知られていることと定義され(A,VI, 2, 408-409)、それに対置される事態が「不明瞭さ」、また過度の明晰さによって意味が明らかでない場合が「曖昧さ」として定義され(A,VI, 2, 409-410)。

「明晰さ」には二種類あり、語(vox)そのものに由来する場合と、言説の文脈(circumstantia)に由来する場合とがある。第一に、語そのものの明晰さの源泉として、(1) 語源(origo)^⑨ (2) 用法(usus)がある。語源はさらに、(1-1) 語源の用法 (1-2) 語源からの派生に由来する類比(analogia ex radice factae derivationis)に分けられる。ここで言われている「用法」とは、「同じ言語を使用する人々に共通に知られている語の意味」のことであり、「類比」とは、「同じ言語を使用する人々に同じように知られた屈折(flexio)や派生による意味」のことである。また、上記(1)と(2)の間に齟齬が生じる場合、次の規則が適用される。すなわち、語源よりも用法に従い、もし用法が疑わしい場合には、語源を採用する。しかし用法が複数存在する場合には、その内にあらゆる用法が含まれているような「形相的意味(significatio formalis)」が抽象される。(A,VI, 2, 410)

第二に、言説の文脈に由来する明晰さには、(1) 言説の内部に由来する場合 (2) 言説の外部に由来する場合がある。前者は、主題が言説そのものに由来する場合、そして主題が曖昧さを取り除いている場合である。たとえば、天文学について論じている時に、雌熊、馬車、犬、リュラについて言及して、曖昧さが生じるような場合である。そして後者は、読者や聴講者によって、外部の文脈から意味が定められる場合であるが、言説そのものは不明瞭なままである。それは言説中の「謎(aenigma)」によって、不明瞭さが生じる場合や文意が隠されてしまう(occulo)場合である。ライブニッツが具体例として挙げているのは、預言者やデルフォイの神託のほか、古代エジプトの哲学者、東洋の哲学者一般、ピタゴラスらである。(A,VI, 2, 419)

3. 名辞

以上の「明晰さ」、「曖昧さ」、「不明瞭さ」の意味論的規定をふまえ、ライブニッツは定義論を次のように続ける。

「一度、意味が定まり、機会が許すならば、その意味を定義へと移さねばならない。(というのも、定義とは、諸々の言葉(verbum)によって表された意味であり、より簡潔に言うならば、意味された意味(significatio significata)だからである。)そして、聴衆や読者の前に提示する必要があるのだ。【中略】一度、定義が打ち立てられたら、たとえ定義を被定義項と置き換えるにせよ、背理を含む表現が生じる余地はないように、もっとも一貫したものにしなければならない。」(A,VI, 2, 411 強調は原文)

ここでライブニッツは、言説中に含まれる「用語(vocabulum)」の議論から、「定義」を確立するための議論へと移行している。この引用から窺い知れるのは、「言葉による説明」としての定義、定義項と被定義項の互換性、そして定義の公共的性格の三つの特徴である。この議論上の前提を経て「名辞(terminus)」について言及される。そして、「名辞という名を、意味された限りでの語(vox)」(A,VI, 2, 411)として用いるとの但し書きの後に、「一般向けの名辞(terminus popularis)」と「専門的な名辞(terminus technicus)」の区別が提示される。前者は、語や意味が一般に受け容れられた用法に基づく場合であり、後者は、語や意味が私的(privatum)、すなわち特定の人物や特定の集団に固有のものである場合である。語そのものが私的であるのは、「造語(vocabulificio)」の結果である(Ibid.)。そうして、「一般向けの名辞で説明されないもの、少なくとも複数の一般向けの名辞で説明されないものなど存在しないというのは本当である」(A,VI, 2, 413)と主張されるが、ライブニッツが「一般向け(popularis)」と言う時、それは決して表層的な風潮への迎合を志向していない。あくまで、「語源」や「同じ言語を使用する人々に共通に知られている語の意味」の分析を通じて到達した「定義」を志向しているのである^⑩。

ライブニッツがニゾリウスに共鳴するのは、共通の言語で「一般的な語」が与えられないようなものを「無」、「空想的(commentitius)」、「不毛」と見なすという原則においてである(A,VI, 2, 413)。これは、ニゾリウスが、哲学の原理を「真理」の観点だけからではなく、「有用性」と「必要性」の観点からも説いた実践的側面(A,VI, 2, 445 ; Breen, I, 17)と彼の存在論を表している。共通の言語で表しえないものの実在性と実践的価値の両側面を否定しているのである。

しかし、ライブニッツはこの原則に完全に従っていたわけではない。というのも、共通の言語では表し難い対象、通常感覚では捉え難い対象の存在を決して認めていなかったわけではないからである。例えば、ライブニッツは、哲学者が一般の人々に常に勝っているわけではないとの前置きをしつつ、「精神の眼(oculus mentis)」による知覚において、他の人々とは区別されると指摘する。すなわち、「反省」や「注意」を伴う知覚、「他の諸事物との比較」である。諸物体とその諸性質のように、それらの本性が他の人々には知覚されてこなかった対象がその一例である。化学、医学においても事情は同じである。これまでに顧みられることがなかったか、全く新しい物体が産出されるような場合である。さらに、生物学では、顕微鏡を用いた観察で新たな性質が発見されるような場合である(A,VI, 2, 413)。このような発見の事例の他に、数学や機械学の対象のように、その大部分は感官が確かな仕方で扱うことのできないものや、共通の用法にはなかなか現れないものもまた含まれる(A,VI, 2, 415)。これらの事例では、偶然や「魂の恣意的な飛躍」に依らない限りで(A,VI, 2, 411)、「新しい名辞」や「新しい意味にとられた名辞」が必要とされる。ライブニッツはこのような条件でのみ「専門的な名辞」を用いている。

ライブニッツはニゾリウスに倣い、「一般向けの名辞で表しえないもの(res)など存在しない」(A,VI, 2, 415)との基本的なスタンスをとる。しかしこれは、「専門的な名辞」で表現する方が適切であるような対象の存在と実践的価値を否定するものではない。上述したニゾリウスの原則と

似通ったところがあるが、その内実は異なっており、決して硬直した原則ではない。

「自然で適切な表現の方法とは、単純で明白であり、いかなる歪曲や粉飾からも免れている。そして容易で一般向けであり、日常的で(e medio sumta)、諸事物に適合している。その光明によって、空虚な精緻さで判断を乱すというよりは、記憶を助けるようなものであると言おう。」(A,VI, 2, 408)

いかなる存在も「一般向けの名辞」で表現されるが、あくまで重要なのは、自然で適切な表現方法の実現である。そのために相応しい名辞を使い分けることこそがライプニッツの原則である。

「一般向けの名辞」の使用が控えられるのは、極端に複合的になる場合や、倦怠感、忘却、曖昧さが生じる場合である(A,VI, 2, 415)。「専門的な名辞」の使用が好まれるのは、「記憶が満たされてしまう」(A,VI, 2, 414)場合である。二種類の名辞を使い分ける際の鍵は、「記憶」^⑩にある。

「名辞を採用する際の規則と基準は、最も経済的な一般向けの性格、または最も一般向けの経済性(compendium)である」(A,VI, 2, 415)。これが名辞を使い分ける際の基準であるが、「経済性」とは、推論における煩雑さの具合の指標である。ここでライプニッツは、名辞の使用者の側に即した議論をしているのである。「明晰さの基準は知性である」(A,VI, 2, 409)と言われる所以はここにある。

4. 論証的知識としての哲学

話題を哲学に戻そう。ライプニッツは、アリストテレスに由来する「公教的(acromaticus)」、
「秘教的(exotericus)」という区別を受け、自身の哲学の方法を提示する。それによれば、あらゆるものが論証されている」前者こそが「哲学のスタイル」として相応しい。これに対し、後者は、
論証を経ずに論じられる事柄を含む方法を指す(A,VI, 2, 416)。

『序文』における論証の雛形は、「専門的な名辞」を「一般向けの名辞」へと分解するプロセスに求められる。すなわち、語や意味が一般に受け容れられていないような名辞を、よく知られた名辞に置き換えることで、判断が確かなものになっていく、そのプロセスである。

「[...] 完全な論証では、根源的で最もよく知られたものへの分解のみが行われる。すなわち主語と述語を定義へと分解すること、そして定義に介在する名辞をさらに定義へと分解することである。」(A,VI, 2, 412)

論証のプロセスとは、命題中の主語と述語を可能な限り定義へと分解して行くことである。哲学者の言説が「定義」に依るのならば、以下のライプニッツの主張が、哲学者採るべき方法とし

て理解されよう。

「誰であれ、注意深く定義し、適切に分割し、何らかの命題を論証もしくは確かなものにする事(certam quendam poropositionem reddere)を職務としている人は、厳密に振る舞わねばならない。論証において、定義されていない語を採るべきではないし、論証されていないか、感覚によって直接的に確かめられていないような、いかなる命題をも採用せぬようにせねばならない。」(A,VI,2,416)

「命題を確かなものにする」ことこそが、哲学にとっての論証である。すなわち、命題中の名辞の意味を解明し、真理を証明して行くことていくことである。このとき、「定義」は論証の道具として位置づけられる。

議論を総括しよう。『序文』では、通常の共通の言語が思考の出発点として据えられ、ライプニッツの自然言語への強い関心が伺われるものの、その意味論的議論の次元と学問的な推論の次元とが明確に区別されていた。それを示すのが、「名辞」の概念である。「一般的向けの名辞」には、共通の言語と表現において重なる部分があるものの、「専門的な名辞」との使い分けのために推論上の基準が存在する。ここから帰結するのは、ライプニッツは哲学的言語として、両者を第二の次元で論じているということである。ライプニッツにとって、「専門的な名辞」を使って議論をすることだけでは、決して哲学のメルクマールにはならない。この点において、ニゾリウスはライプニッツに一つのモデルを提供した。言語表現の問題を経て、ライプニッツが向かうのは「論証」である。論証的知識の希求こそが、ライプニッツにとっての「哲学のスタイル」であったのだ。

日本哲学会林基金による研究助成(2014年4月から2015年3月まで)に厚く御礼申し上げます。

一次文献と略記法

G.W.Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Deutsche Akademie der Wissenschaften(ed.), Akademie-Ausgabe, Darmstadt und Berlin, 1923ff. [A]

————— *Philosophical papers and letters*, L. E. Loemker (tr. and ed.), 2nd ed., Dordrecht and Boston, 1969

————— *Physique et métaphysique : opuscules de jeunesse*, R. Violette (tr.), Limoge, 2012

M. Nizolius, *De veris principiis et vera ratione philosophandi contra pseudophilosophos libri IV*, 2 vols. Q. Breen (ed.), Roma, 1956 [Breen]

※本文中のライプニッツからの引用は拙訳であるが、上掲の各種近代語訳を適宜参照した。読解の便宜上、原語を併記することが望ましい場合には、()を用い、解釈の必要上、原語に無い訳語を補った場合には、[]を用いて記した。

注

①マリウス・ニゾリウスの生没年には諸説ある。生年は1488年または1498年であり、没年は1565年から1566年の間、または1567年である。彼のこの著作は、イタリアのパルマで1553年に出版された。

②Breen, I., LXVI

③N. W. Gilbert, *Renaissance concepts of method*, New York, 1960, 49

④*Ibid.*, 60-64

⑤G. Nuchelmans, “Logic in the seventeenth century : preliminary remarks and the constitution of the proposition” in : D. Garber and M. R. Ayers (ed.), *The Cambridge history of seventeenth-century philosophy*, Cambridge, 1998, 103-131

⑥C. Mercer, “Leibniz and the German tradition of the power of language” in : D. Berlioz and F. Nef (ed.), *Leibniz et les puissances du langage*, Paris, 2005, 15-42

⑦パオロ・ロッシ『魔術から科学へ』前田達郎訳、サイマル出版、1970年

ロッシは本書で、フランシス・ベーコンの論理学にペトルス・ラムスの色濃い影響を読み取り、修辞学的伝統と科学方法論、とくに後者における推論について論じた。ラムスと同様にニゾリウスの名も挙げ、両者のもつ実践的性格が後の時代の論理学改革の動きに影響を与えた点を指摘した上で、ライプニッツの『序文』もこの流れの中に位置づけている。182-184頁

⑧論理学の第二の部分については、以下を参照。J. -B. Rauzy, *La doctrine leibnizienne de la vérité : aspects logiques et ontologiques*, Paris, 2001, 117-203

⑨ライプニッツの語源研究の発展については以下を参照。H. Aarsleff, “The study and use of etymology in Leibniz” in : *Studia leibnitiana, supplementa III*, 1969, 173-189

⑩ステファノ・ゲンジーニは、ライプニッツの知識論と言語哲学の分析において、形而上学的次元と歴史的次元を厳密に区別する必要性を説く。『序文』の *terminus* に関し、語の共通の用法における意味論上の揺れと、学問的な文脈での規則化による安定性との間で厳密な境を与えるものであると解釈している。S. Gensini, “The Leibnizian concept of “significatio” ” in : K. D. Dutz and S. Gensini (ed.), *Im Spiegel des Verstandes Studien zu Leibniz*, Münster, 1996, 69-98

⑪本論では「記憶」と言語の記号としての側面の関係については紙幅の関係上、立ち入らない。以下を参照。M. Dascal, *La semiologie de Leibniz*, Paris, 1978, 135-171

本文 : 7035 字 文末脚注 : 833 字 合計 : 7868 字